

新年のご挨拶

(令和7年 一般社団法人情報サービス産業協会 新年賀詞交換会より)

会長挨拶

一般社団法人 情報サービス産業協会
会 長 福永 哲弥

あけましておめでとうございます。新年を迎えるにあたり少しお話をさせていただきます。

社会のデジタル化が急速に進展する今、このデジタルの時代は個人が主役の時代でもあります。いきなり JISA の活動宣言といったお話で恐縮ですが、「デジタル技術で人が輝く社会を創る」、このようなビジョンを掲げる JISA といたしましては、この新年こそ、個人を先端デジタル技術でエンパワーする、特に情報サービス産業内外にてご活躍の ICT エンジニアに自律性をもって高度デジタル人材としての能力を開発していただく、そして、今や私たちは、能登半島での被災者の方々等天災に苦しむ方がおられ、ウクライナや中東地域での紛争といった国際情勢、さらには、予測不能の時代ともいわれる、将来を見通すことが困難な世界の政治経済情勢の中にいるわけですが、こういう厳しく難しい社会環境だからこそ、これらの高度デジタル人材と企業・産業が一体となって、「人が輝く社会」、様々な産業に生きる個人が思う存分持てる能力を発揮し、その能力発揮・価値創造にふさわしい報酬・賃金といった対価を得る、そんなデジタル社会に向かっての社会進化の環境整備に JISA は今年も努めてまいりたいと考えております。

情報サービス産業にフォーカスしてお話を続けます。私事にてお恥ずかしいのですが、新年家内と数十年前前の思い出話をされていて、自分たちの就職活動の話になりました。家内が当業界某企業の OG を訪問した時の話であります。その先輩曰く、「ここは、あなたのような文系の、コンピュータサイエンスを数単位とっただけの人が来るところじゃない、ICT 技術をなんだと思っているの。」と冷たくあしらわれたそうであります。この話には私は二つのインプリケーションがあると思います。一つはこの先輩は正直申し上げて技術というものの本質を正しく理解していないのではということ、今一つはそうはいってもこの先輩の技術者としての強烈な自負・矜持は素晴らしいということでもあります。



私たちは、業界内外の ICT・デジタル人材が、既存 ICT 技術の進化はもとより、生成 AI をはじめとする先端デジタル技術の開発・応用に専心しなければならない、そして当業界企業は、この個人の技術探求をもとに、様々な社会課題の解決につながる安心安全なデジタル社会の確立を目指し、技術の社会的実装に真剣に取り組む、そんな企業の方向性をもって事業の現場を創らなければならないと考えます。それらの結果として個人は今トレンドな賃上げにつながるリワード・報酬を、企業は収益成長という果実を、持続的に得ることが出来るのだと思います。

そしてここに集う皆様の前では言うまでもないことかもしれませんが、私たちの企業活動のベースとなるこれらの個人の活動は、すべて ICT・高度デジタル技術というものの本質を正しく理解した上での、技術者としての誇りがあってこそそのものだと申し上げたいと思います。JISA は日本に出来るだけ多くの誇りある ICT 技術者・デジタル人材を育てるべく、本年も努力を続けてまいります。ここに集う皆様のご支援を切にお願い申し上げます。

昨年、JISA は創立 40 周年を迎え、24 の国・地域とともに社会のデジタル化を推進する情報サービス産業の国際団体、ASOCIO の「デジタルサミット」を東京で開催いたしました。また、昨年 10 月末には、「生成 AI は、我が国産業の国際競争におけるゲームチェンジャーとなり得るのではないか。」と冒頭に記した「生成 AI 技術の社会的活用にかかる提言」をとりまとめました。単に当業界という視点ではなく、日本社会全体を見通す視座での社会提言を行っています。これらをはじめとする JISA の活動には経済産業省・IPA をはじめとする政府関係者の皆様や多くの学識経験者、他産業の企業人の皆様、そしてなによりも会員企業各社に多大なご支援を頂戴しております。この場を借りて心よりの御礼を申し上げます。

さて、本日は、公務ご多忙の中、竹内真二経済産業大臣政務官にお越しいただきました。竹内大臣政務官をはじめ、多数のご来賓の方々にお出でいただいております。御礼申し上げます。また、全国からたくさんの JISA 会員の皆様方にもお越しいただいております。ご来場誠にありがとうございます。

本日、ここにご参集いただいた皆様のお力を結集し、当業界に生きる人材をはじめとして、ICT・デジタル人材がその能力を拡充し、技術者としての誇りをもって、安心安全なデジタル社会の確立にまい進する、人が輝く社会の創生を目指しての新しい年の JISA 活動のスタートを切りたいと考えます。皆様と一緒に力を合わせて、皆様の企業を、産業に働く人々を、そして日本全体を盛り上げてまいりましょう。本日はご参集いただき誠にありがとうございました。本年も何卒宜しくお願い申し上げます。

来賓挨拶

経済産業大臣政務官
竹内 真二

皆様、あけましておめでとうございます。ご紹介いただきました経済産業政務官を拝命しております竹内真二です。本日は情報サービス産業協会の賀詞交歓会にお招きいただき、誠にありがとうございます。

昨年は、能登半島地震をはじめ、台風や豪雨など、自然災害に見舞われた一年でした。被災された方々に、改めて心よりお見舞いを申し上げます。経済産業省としても、復旧・復興支援に引き続き全力を挙げて取り組んでまいります。

昨年は、30年ぶりの高水準の賃上げと設備投資、史上最高水準の株価、名目GDP600兆円超えといった、国内経済にとっても明るいニュースを耳にすることができた一年でした。

一方で、消費は、まだまだ力強さを欠いています。賃上げも、地域や業態によって、ばらつきがあるのが現状です。地域の中堅・中小企業を含めて継続的な賃上げを実現し、好循環を定着させることができるかどうか、2025年はまさに正念場の1年と言っても過言ではないと思います。

昨年策定した総合経済対策や補正予算を総動員し、前向きな流れを、しっかりと継続・拡大させてまいります。情報サービス産業協会の皆様方におかれましても、賃上げ・設備投資・価格転嫁などの面で、積極的な取組を是非ともお願いしたいと思います。

世界に目を向けると、今年は、米国で新政権が誕生します。強固な経済関係は、二国間関係の土台をなすものです。特に投資については、安心して日本企業が判断できる環境を整えることが重要です。米国の新政権には、まずこの点をよく伝えながら、日本の国益に資する形で、日米の経済関係を一層発展させたいと考えています。

昨年は、DXやGXの進展に対応した、新しい政策展開を打ち出した1年でもありました。

半導体については、2030年までに10兆円以上の公的支援を行う新しい枠組みである「AI・半導体産業基盤強化フレーム」を策定しました。この枠組みを最大限活用し、生成AIや社会課題解決に不可欠な半導体の供給体制を強固にしております。

昨年末には、「第7次エネルギー基本計画案」と「GX2040ビジョン案」をとりまとめました。DXやGXの進展に伴い電力需要増加が見込まれる中、脱炭素電源の確保が



国力を大きく左右する状況です。現実を見据え、再エネも原子力も最大限に活用する、脱炭素電源を新しい産業集積の起爆剤にする、といった方針を示しました。今年は、この新しい方針の下で、1つでも多く具体的な進捗を皆様にお示ししたいと思います。

さて、デジタル分野では、昨年は、生成 AI が大きな進化を遂げた 1 年でした。生成 AI は、様々な創造的な作業を人間に代わって行えると期待されている革新的な技術であり、内燃機関やインターネットに次ぐ「歴史の画期」となる可能性を秘めています。

こうした変革の時期は、新しい価値を創造し、社会を豊かにするチャンスです。特に日本には、人口減少の影響で生産性向上への切実なニーズがあります。こうした日本だからこそ、AI のポテンシャルを最大限に引き出し、高い競争力を持つサービスの開発や利活用を促進し、イノベーションを創出していくことが重要です。

経済産業省としては、昨年来取り組んできた計算資源の調達支援にとどまらず、データの活用促進に向けたエコシステムを構築するとともに、計算資源の高度化や更なる量的拡大を、エネルギー・GX 政策と連動させる形で進め、AI の開発力・供給力の強化に取り組んでまいります。

また、開発力・供給力の向上は、AI の利活用が進んで初めて持続的になります。このため、昨年 2 月に設置した AI セーフティ・インスティテュートを核に、AI に伴うリスクに対する日本の管理能力を向上させるとともに、AI・データの利活用を阻む企業等における情報システムのモダン化や、AI の導入事例の創出、利活用を進める幅広い人材の育成などに総合的に取り組んでまいります。

今後の経済社会のイノベーションのコアであり、変化の激しい AI に対し、今後も不断かつ迅速に対応策を検討し、実行してまいります。

これまでも情報サービス産業協会におかれましては、様々なデジタル技術を社会実装することを通じて、我が国の DX を牽引されてきました。生成 AI による変革の時代においても、貴協会がこれまで蓄積してきた経験やノウハウを活用し、デジタル技術の社会実装において、各方面でリーダーシップを発揮されることを大きく期待しております。

いよいよ本年 4 月 13 日から、大阪・関西万博が開催されます。「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、「未来社会の実験場」として、最先端技術を発信・社会実装する貴重な機会です。世界中から来訪者を迎えるこの一大国際イベントを、是非一緒になって盛り上げていただきたいと思います。

既に皆様には様々なご協力をいただいているところではありますが、チケットの購入も含めて、一層のご協力を賜ればと存じます。

最後になりますが、今年が、情報サービス産業に関わる皆様にとって、益々の繁栄の年となることを心から祈念して、私の挨拶とさせていただきます。本日はご盛会まことにおめでとうございます。